

司馬遼太郎：街道をゆく「阿波紀行」より

鈴木英文

「阿波堂浦( どのうら) の漁師が、江戸初期、魚釣りのテグスを開発した」。作家の司馬遼太郎氏は、街道をゆくシリーズの「阿波紀行」の中で書いている。書かれていることを要約すると、「一本釣りという漁法は古くから

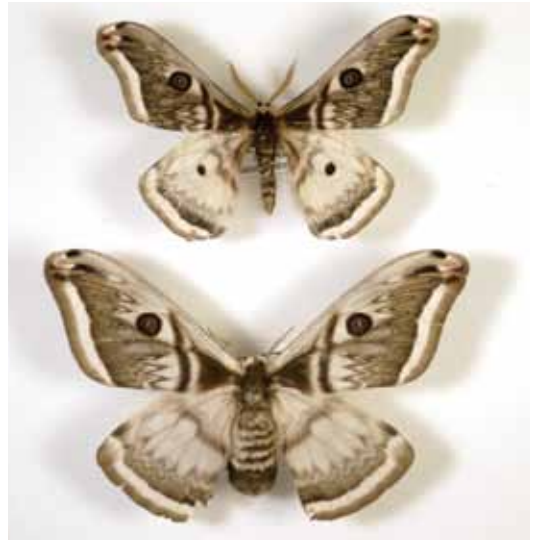


小鳴門海峡と堂浦

存在したが、釣針につけている糸が麻糸だったから、魚が警戒して十分にはとれなかった。堂浦の漁師某が、大阪の薬種問屋の町道修町で、生薬の梱包に使われていた半透明の糸を見つけた。丈夫で半透明だから、水中でも糸とは見えないはずで、これで一本釣りをすれば大いに魚が釣れると思った」。徳島県鳴門市堂浦の漁師たちが、江戸時代に「テグス(天蚕子)」と呼ばれる糸に出会い、それを初めて釣り糸として利用したらしいことが書かれている。堂浦は対岸の島田島との間の小鳴門海峡と言われる少し広めの川ほどの幅の海峡に面している。

テグス作りには、繭を作る寸前の老熟幼虫から絹糸腺を取り出し、酢酸液に浸してから引き延ばし粗テグスを作るが、これを中国南部(江西省～海南島)から仕入れる問屋が大阪でさかえ、問屋が仕入れた粗テグスを、鉄や銅の板に細く丸い穴をあけ、そこを通すことで太さを均一にする“磨き加工”をして、本テグスとして販売する、テグスの生産地として、徳島県鳴門市堂浦、兵庫県淡路島の洲本市由良などが知られるようになった。

テグスサン(フウ蚕・楓蚕) *Saturnia (Eriogyna) pyretorum* については「家蚕と天蚕 2」にも少し書いたが、インドからベトナム、中国南部、台湾などに分布し、食樹はフウ(楓)*Liquidambar formosana* (フ



テグスサン上♂下♀



クスサン♂

ウ科フウ属)で、日本では街路樹などとして植えられることもある。成虫は年1化で、1～2月に出現、2～3月に産卵し1か月ほどで蛹化、夏秋を蛹で過ごし、冬に羽化する。

台湾では日本統治時代に中国南部より導入され、粗テグスの生産が行われたが、戦後ナイロンテグスの普及でテグス生産が行われなくなり、飼育していたものが野外に広がったと言われる。

テグス蚕は日本に産しないし、導入もされなかったが、同属のクスサン*Saturnia (Rinaca) japonica* の老熟幼虫の絹糸腺からテグスを作った記録があるようだが、これが産業として成り立っていたかは疑わしい。